

たまい場つうしん 第6号

— 大人も子どもも気軽に立ち寄ってお茶のみ話に花が咲く、そんな地域の公民館をめざして名づけました —

第29回 白梅まつり



のうちに終わらせることができました

白梅は、笑顔の集まる交叉点

今年も無料でお迎えしました・・・という、頭が下がる思いの3組をご紹介します



長年にわたり、演示のときの音響は、古田さんと原島さんが受け持ってくださいています。中でも、原島さんは、演示の様子をビデオに撮ったものをDVDに焼き付けて、演示部門参加サークルに差し上げています。

裏庭の子どもひろばで恒例になっている「ボーイスカウト」主催の「楽しいテント」・・・自分で焼くホットケーキづくり、プラ板工作など楽しいことがいっぱい。白梅分館をベースにして活動をしているので、年に1回は恩返しをしようという気持ちで、無料で楽しんでもらっているとのこと。



「第二陽青会」主催の「お茶席」・・・第1回の白梅まつりから参加しています。和菓子や掛け軸、花、茶わんに至るまで、季節を感じるような心遣いが嬉しいです。

「堅苦しい」というイメージをなくして、気楽にお茶を楽しんでももらいたいと、誰でも無料で体験できるようにしています。

五月二十九日(土)と三十日(日)に、第二十九回白梅まつりが行われました。今年は、テーマを「白梅は、笑顔の集まる交叉点」としまして、多くの方々との交流を深め、さらにその輪が広がるような楽しいまつりを目指しました。小雨に降られた時間もありましたが、来場者は二日間で一七九人を数えました。どんな笑顔が集まったのでしょうか？主催者、参加者、来場者など、さまざまな方に感想をお聞きしました。

指田実行委員長(屋外部門)

白梅分館で活動している、四十八サークル全てが参加して、まつりを盛り立てました。親子が楽しく過ごせるような工夫もありました。故石川常太郎氏から寄贈された、会館のシンボルである「白梅」が、今年もたわわに実をつけました。白梅まつりも回を重ねるごとに、薰り高い文化の果実を実らせてきたと感じています。これからも、地域の文化の発信拠点として、さらに輝きを増すよう、皆で力を合わせていきたいと思えます。

鈴木副実行委員長(演示部門)

白梅では、演示サークルが交代で、「会場整理係」「誘導係」をします。会場の外の廊下が、どうしても賑やかになってしまったため、静かにしてもらうように声をかける役目です。今年は、「静かに」と書いた紙を「うちわ」に貼って、声を出している人に見せました。効き目がありました。これを見た本館のサークルの人から、「本館まつり」でこのアイデアを使わせて欲しいと頼まれました。大勢で考えると、いろんな知恵が湧くものです。

渡部副実行委員長(展示部門)

演示部門最後の出し物の「太極拳」で、一緒に体を動かしているうちに、最後のあ

いさつの言葉を忘れてしまおうくらい、頭が空っぽになってしまいました。リラックスできました。それぞれの部門で、良い発表ができました。また一年、研鑽を積んで、来年のまつりに備えようと思います。

小山副館長

白梅に来て、三年目のまつりとなりました。と同時に、今年、還暦を迎える者にとっ

て、最後の「まつり」でもありました。とにかく、この地域は、人と人のつながりが強く、何をすることも、自分のこととして捉えて、気持ちよく集まってくたさるところです。今年も、「まつり」に向けての準備のときから、「笑顔の集まる交叉点」が始まっていたのだ、とつくづく思います。



白梅まつりの感想は、四ページにも掲載していますので「ご覧ください。」

す)の生まれです。思い出の中に、「田んぼ」にまつわる話がよく出てきました。

白梅分館で活動している人々の中に、その昔机を並べて勉強した同級生同士が何組かいらっしやいます。その中から、前回は昭和十一年子年(丑年も含む)生まれの六人の方にお集まりいただき、「座談会」あんなこと、「こんなこと」と称して、子ども頃のくらし、町の様子など当時の思い出を賑やかに語っていただきました。今回は、昭和五年午年(未年も含む)生まれの三人にお集まりいただき、あの頃に戻って若やいだひとときを過ごす中から、貴重な地域のお話を聞くことができましたのでご紹介します。

◆尋常高等小学校入学 昭和十二年四月
尋常科は、六年生まで(義務教育)
高等科は、尋常科卒業後二年間

〇小さい頃の思い出は？
祖父の思い出 庭の桃の葉っぱを揉んで、出てきた青い汁を、おまじないを唱えながらおへそにつけてくれた。熱冷ましによく効いた。そのおまじないの言葉をもっとしっかり聞いておけばよかったと思う。

父の思い出 飲ん兵衛だった父に、夕方になると酒を四合ずつ買いにやらされた。あるといっぺんに飲んでしまうから、という理由だったようだが、子ども心に、その都度買に行くのは面倒くさいので、まとめて買って欲しいと思った。

遊び 学校から帰ると、遊びよりも家の手伝い(田んぼ)の方が多かった。多摩川に遊びに行く同級生が無性に羨ましかった。お茶の入った大きなヤカンや、手づくりのおやつを運ぶ手伝いもよくやらされた。

旧道を走るバス 青梅と立川の間を、一日一本、木炭車のバスが煙を出して走っていた。お金が無い時代だったから、乗る人はほとんどいなかった。珍しくて、バスのあとを追いかけては、「良い匂い！」と排気ガスを吸い込んでいた。手を挙げると、その場所で停まってくれた。



〇学校生活の思い出

校舎に入る前に 校門入って、まず二宮金次郎の像(後ろに御神影)に一礼。次に職員室に向かって一礼。

弁当 弁当を持ってくる子は少なかった。多くの子は、家に食べに帰っていた。雪が降ると、家に帰るのは大変だからと、弁当を持たせてくれた。雪合戦の楽しみよりも大きかった。

鉢巻の話 鉢巻きを忘れた子が、往復一時間もかかる家に取りに行かされた。次の日、その子の親が、何十本も鉢巻きを縫って子どもに持たせてよこした。誰かが忘れた時に家に取りに行かなくてすむようにという心づかいは今でも温かい。

いつの間にか・・・ 校舎は平屋建てで、一学年にはひとクラスしかなかった。一緒に入学した同級生、約六十人の中には、口減らしのために四、五年生で売り飛ばされた子もいる。

福生の十傑 とにかく足が速かった。西多摩大会にもよく出場して、福生が一位ということが多かった。

入学式 和服で来た子が多かったことも時代を表していると思う。

遠足 低学年の時は、拜島大師、十二天などに歩いて行った。立川の農事試験場や御岳登山などもあった。高学年では、戦争が

激しくなって中止となった。

先生の訓え その頃教えてもらった、「我が物と思えば軽し傘の雪」という言葉が、その後の自分の人生に大いに役立っている。

鉄棒を作った 高等科のとき、校庭に鉄棒を作るために、小作から成木、小曾木の方に丸太を採りに行って、二人で運んできた思い出がある。

空襲警報 授業中に警報が鳴って家に帰るときのこと。学校を出たと思ったら、もう頭の上をB29が3機ずつ飛んできた。あわてて、草むらに身をかくした。怖かった。

貯金箱 学校で貯金を奨励していて、貯金箱が置いてあった。親からもらって入れた。その当時の、お金といえは、半銭(五厘)から一円札(百銭)までで、例えば、一銭で茶玉のような飴玉が五、六個買えた。

〇八高線のできごと あれこれ

正面衝突 拜島駅と小宮駅間の多摩川の鉄橋で、電車が正面衝突するという痛ましい事故があった。先頭車両同士が持ち上がる状態になったまま、台風の後の濁流に落下した。実家に戻る直前に命を落とした多くの復員兵が気の毒だった。

転覆事故 これも戦後間もなくのこと。東飯能と高麗川の間で、買出し客を乗せた電車が転覆して、多くの被害者が出た。

〇まず自己紹介から
森田貞蔵さん 熟年ひろば
木村ミヨ子さん コール白梅 みふし会(日本舞踊)
木下藤夫さん 熊川分水に親しむ会

三人の共通点は、農家(木下さんは豆腐屋)でしたが、副業で百姓をしていたそうです。

○戦争の思い出

必勝祈願 熊川神社で祈願した人は生きて戻る、という話が広まり、遠くからお参りに来る人も多かった。熊川の人が出征するときは、熊川神社で必勝祈願の祈祷を受けた後、拝島駅まで消防団や婦人会の人たちと歩き電車で戦地に向かった。小学生も全員、拝島駅の五日市線ホームに並んで立ち、日の丸の小旗を振って見送った。同級生のお兄さんが最初の戦死者となった。そのときは町葬をした。

爆弾投下 今、「フシロー」がある辺りに、爆弾が落とされた。五日市線の鉄橋を狙ったのか、滑走路と間違えたのか定かではないが、畑に大きな穴が開いた。後日、その穴を埋める手伝いをした。下の田んぼに落ちた不発弾で、命を落とした人もいた。

お召し列車 陸軍士官学校の卒業式にご出席の天皇陛下を乗せた、菊の御紋のお召し列車を全校生徒で八高線ホームでお見送りした。絶対に顔を上げてはいけない、じっと下を向いたままでと言われていたので、本当に何も見えなかった。

八王子大空襲の夜 終戦の年の八月一日夜、八王子大空襲で、市内の民家、工場、商店がごとごとく焼けつくされた。翌日、八王子駅の陸橋から見た光景は、広島や長崎の惨状と全く同じだった。その夜は、熊川で

も焼夷弾が落とされて、学校や数軒の民家が焼けた。

学徒動員① 現在の日野自動車で、戦車や上陸用舟艇の部品の製造を手伝った。原料が枯渇すると、次は、現在の多摩平団地付近の松林で松根油採取の仕事をさせられた。毎朝、日野駅に集合し、軍歌を歌いながら日野坂を行進して現場に向かっていったのだが、あるとき、陸軍のトラックが運転を誤り、我々の列に突っ込んだ。二年生の級長が死亡した。名誉の戦死だと、学校葬をしたが、文句を言えない時代だった。

学徒動員② 飯能で、貨車で着いた食糧を運ぶ(隠す)仕事をしていた。生きた牛が何百頭も届いたこともあった。あれは、どうしたのだろうか？明星大学の学生と宿舍が一緒に、あいさつが足りないといよく叩かれたことを思い出す。

学徒動員③ 片倉製糸工場で事務の手伝いをした。

終戦の日① 玉音放送があるからと、学校は休みでラジオ放送を待っていた。おんぼろラジオでは、天皇の声は聞きとりにくかったが、アメリカに降伏したらいいことが分かった。片倉製糸工場に動員で行っていた妹達が泣きながら帰ってきたのを思い出す。

終戦の日② 学徒動員先の飯能の山の中で

終戦を迎えた。将校が、百円札を一枚ずつくれた。不思議な思い出である。

終戦後 アメリカ兵が怖かったという思いがある。町会から、「女の子は男の子のような格好をしていなさい。」と言われた。

○くらしの様子

片倉製糸工場の移り変わり その昔は、森田製糸所だったが、昭和三年に廃業。その後、片倉製糸工場となり、長野県などから来た女工さんが三百人くらい働いていた。戦争が始まると、落下傘や戦車の部品の製造に変わった。

戦後は、自転車(シルク号)を生産していたが、平成元年、八王子に移転。取り壊された後は、「片倉跡地」となっている。※「福生歴史物語」によると、森田製糸所は明治六年に創業された、東京府で最初の製糸工場であった。政策と輸出の伸び、好景気の時代に支えられて相当な利益を上げた。やがて、生糸繭価の暴落、関東大震災、金融恐慌などの打撃を受けて衰退した。**トロッコ**が走っていた 多摩川に東京府砂利工場があった関係で、砂利を拝島駅に運ぶために、ディーゼル機関車でトロッコを



取り壊し前の片倉工場の事務所

走らせていた。砂利を降ろした後の空っぽの車両に乗せてもらったこともある。また、熊川駅と片倉製糸工場の間にも、石炭を運ぶトロッコが走っていた。

夜はランプ 電気がなくて、ランプを灯りにしていた。芯の手入れやスズで汚れたガラスの掃除を手伝わされた。

千歳屋 呉服屋というものが、三越や白木屋のように、その時代の流行を先取りして、勢いを映し出すものだとすると、まさに、千歳屋呉服店はこの地域の繁盛店だったと言える。片倉製糸工場で働く女工さんたちにも人気があった。

○皆さんの話を聞き終えて

木下さんが、「昭和十年代の熊川村」という題で、当時の商店の様子(屋号・店名・住所・地図上で場所を示す)を四枚にまとめて持って来てくださった。記憶力のすばらしさに、ただただ驚くばかり。**木村さん**の、誰か引っかけようと、草の先を結んだという悪戯の話を聞くと、どんな時代にも子どもは楽しいことを見つけれられる「たくさんしい存在」だといつくづく思う。**森田さん**の、「よく八十歳まで生きたと思う。」という言葉に込められた、深くて大きな思いを押し量るヒントのこく一部を、この座談会でいただけたと思う。